

男女混合駅伝大会で優勝した生徒たちが、打ち上げで一緒に裸でシャワーを浴びる話

田島悠斗は14歳の中学二年生。あの日は、中学校の陸上部が男女混合駅伝大会で優勝を掴んだ、忘れられない日だった。最終区間のランナーとして、タスキを受け取った瞬間、心臓が爆発しそうだった。沿道で仲間たちが叫ぶ声、特に女子キャプテンの彩花の「悠斗、飛ばせ！ お前ならいける！」が、僕の背中を押した。彼女の長い黒髪が風に揺れ、汗で光る笑顔がまぶしかった。ゴールテープを切った瞬間、仲間たちが駆け寄り、汗だくで抱き合った。彩花が「やった！ 悠斗、最高！」と叫び、葉月が目を潤ませて「信じられないよ...」と呟いた。亜美が「優勝！ やばいって！」と飛び跳ね、琴美が「最高！」と拳を振り上げた。

美月は静かに笑いながら「みんな、ほんとすごいね」と囁いた。拓也が「悠斗、ありがとう！」と肩を叩き、健太が「マジで...勝ったんだ...」と呆然と呟いた。あの瞬間、僕たちは世界の頂点にいた。

レース後も熱気で溢れていた。拓也が「悠斗、ラストのダッシュ、めっちゃかっこよかったぜ！」と笑い、彩花が「ほんと、ゾクゾクした！」と目を輝かせた。葉月は「みんなの走り、めっちゃ感動したよ」と静かに言った。亜美が「これで学校のヒーローじゃん！」と笑い、琴美が「次はもっとぶっちぎるよ！」と気合いを入れた。美月は「なんか、夢みたい」と呟いた。顧問の佐藤先生が、珍しく柔らかい笑顔で言った。「お前ら、よくやった。歴史に残る勝利だ。さあ、汗だくで汚ねえから、シャワー浴びてこい！」みんなが「うおー！」と叫び、疲れた体を引きずって校舎の屋上へ向かった。そこには、プールに併設された簡素なシャワー室があった。コ

ンクリートの床に錆びたパイプが並び、シャワーヘッドから勢いよく水が噴き出す、飾り気のない場所だ。

佐藤先生が少し困った顔で続けた。「ただ、シャワーはここ一箇所しかねえ。今日は優勝記念だ、男女関係ねえ、みんなで浴びちまえ！」その言葉に、一瞬シーンとなった。亜美が「え、うそ、マジ！？」と笑い、健太が「ちょっと...マジかよ」と顔を赤らめた。でも、彩花が「いいじゃん！ 勝ったんだから、気にしないでいこう ！」と笑い、雰囲気が一気に和んだ。勝利の興奮が、恥ずかしさを吹き飛ばしていた。

シャワー室に着くと、夏の風がプールサイドを吹き抜けた。ユニフォームは汗と埃でベタつき、女子のセパレートタイプのユニフォーム—ヘソ出しのタンクトップと体のラインを強調するブルマーが、いつもより目立っていた。男子はタンクトップと短パン。普段ならこんな格好で近くにいるだけでドキドキす

るけど、今日は違った。優勝の喜びが、僕たちを子供のようにはしゃがせていた。